

# 目 次

	はじめに	i
	序章	vi
<b>理論編</b>	なぜ英語学習ポートフォリオが必要なのか	1
<b>第 1 章</b>	英語教育における授業設計の問題	2
	▶ 1. 英語教育に関する調査	2
	▶ 2. 英語学習の枠組みを変える必要性	6
<b>第 2 章</b>	学習ポートフォリオの可能性	10
	▶ 1. 学習ポートフォリオとはどのようなものか	10
	▶ 2. ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)	13
	▶ 3. ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP)	17
<b>第 3 章</b>	Can-do リストという考え方	24
	▶ 1. Can-do リストの導入	24
	▶ 2. 各学校における Can-do リストの作成	24
	▶ 3. これまで開発された Can-do リスト	25
	▶ 4. Can-do リストを使った授業改善の可能性	29
	▶ 5. Can-do リストから英語学習ポートフォリオへ	30
<b>第 4 章</b>	ポートフォリオで取り組む英語学習の観点	32
	▶ 1. 英語学習でポートフォリオを活用するために	32
	▶ 2. Communicative Language Teaching (CLT) の観点	32
	▶ 3. CLT を考える 8 つの観点	33
	▶ 4. 学習者の能力の見直し	34
	▶ 5. 教師の役割の転換	49
	▶ 6. 教師のポートフォリオ (J-POSTL)	52

<b>第5章</b>	<b>ポートフォリオで取り組む英語学習の方法</b> .....	55
	▶ 1. 学習方法の転換 — 交流型の学びへ	55
	▶ 2. プロジェクト型学習	55
	▶ 3. プロジェクト型学習に必要な要素	57
	▶ 4. プロジェクト型学習の例	61
<b>開発編</b>	<b>高校生用ポートフォリオの開発</b> .....	69
<b>第1章</b>	<b>英語学習ポートフォリオの開発</b> .....	70
	▶ 1. My Learning Mate の開発	70
	▶ 2. ポートフォリオ (MLM) の構成	71
	▶ 3. 教科書をもとにポートフォリオを作成する	77
	▶ 4. 基本的な使用方法	85
<b>第2章</b>	<b>英語学習ポートフォリオの試行的な取り組み</b> .....	87
	▶ 1. 高校での実践	87
	▶ 2. 英語学習への意識の変化	92
	▶ 3. 教師の変化	94
<b>実践編</b>	<b>多様な学習環境での取り組み</b> .....	97
<b>第1章</b>	<b>教室を飛び出してモチベーションアップ</b> — 東京学芸大学附属竹早中学校での実践 [松津英恵] .....	101
	▶ 1. 学校の実態	102
	▶ 2. MLM 導入のねらい	102
	▶ 3. MLM の実践	106
	▶ 4. 成果と課題	117
<b>第2章</b>	<b>コミュニケーション活動で英語学習への姿勢改善を</b> — 蒲田女子高等学校での実践 [木内美穂] .....	123
	▶ 1. 学校の実態	124
	▶ 2. MLM 導入のねらい	124

- ▶ 3. 1年目の取り組み 125
- ▶ 4. 2年目の取り組み 133
- ▶ 5. まとめ 136

### 第3章 生徒のゆるやかな学びの見える化

—群馬県立太田フレックス高等学校での実践 [齋藤理一郎] .... 140

- ▶ 1. 実践校・クラスの実態 141
- ▶ 2. MLM 活用授業の実践報告 143
- ▶ 3. まとめと今後の展望 154

### 第4章 授業を大胆に再構成

—川口市立県陽高等学校での実践 [鶴田京子] ..... 158

- ▶ 1. 学校の実態 159
- ▶ 2. MLM 導入のねらい 160
- ▶ 3. MLM 導入の結果 161
- ▶ 4. 教師としての自分の変化／気づき 172
- ▶ 5. 課題 174

### 第5章 教師の自己成長のためのツール

—筑波大学附属坂戸高等学校での実践 [福田美紀] ..... 175

- ▶ 1. 学校の実態 176
- ▶ 2. MLM 導入のねらい 177
- ▶ 3. MLM 導入の結果 178
- ▶ 4. MLM の運用方法と今後の課題 193

**作成編** 使用する教材をもとにした作成方法 ..... 197

### 第1章 英語を学び続ける学習者の育成をめざして

—東京学芸大学附属竹早中学校での MLM 作成例 [松津英恵]  
..... 199

- ▶ 1. MLM の構成 199
- ▶ 2. MLM および各項目作成における留意点 199

<b>第2章 思考力・国際理解の姿勢を養う授業をめざして</b>		
— 筑波大学附属坂戸高等学校での作成例 [福田美紀] .....	209	
▶ 1. MLM の構成	209	
▶ 2. MLM の作成	209	
▶ 3. 授業設計と実践	212	
	おわりに	224
	参考文献	226
	索引	231
	執筆者紹介	235

# 理論編

## なぜ英語学習ポートフォリオが必要なのか

---

- 第 1 章 英語学習における授業設計の問題
  - 第 2 章 学習ポートフォリオの可能性
  - 第 3 章 Can-do リストという考え方
  - 第 4 章 ポートフォリオで取り組む英語学習の観点
  - 第 5 章 ポートフォリオで取り組む英語学習の方法
-

## ▶ 1. 英語教育に関する調査

英語学習ポートフォリオについて説明する前に、日本の中等教育の英語学習の実態を理解するための2つの調査結果について紹介します。1つは、文部科学省が高校3年生を対象に行った、「どのような英語学習に取り組んできたのか」という調査、もう1つは、ベネッセ教育総合研究所が英語教師を対象に行った調査です。

### 1.1 文部科学省の調査

まずは、平成26年に実施された文部科学省（以下、文科省）の調査について、そこで指摘された課題について触れたいと思います。この調査の目標は、「高校3年生を対象に、英語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）がバランスよく育成されているかという観点から、生徒の英語力を測定し、調査結果を学校での指導や生徒の学習状況の改善・充実に活用」することを目的に、全国の高校3年生約7万人（国公立約480校）、および調査校の教師を対象に行ったものです。

この調査で明らかになった課題は、「学習者の態度」「学習の実情」、そして「教師の指導」の3点です（文部科学省2015）。

#### [学習者の態度]

- ・ 英語が好きでない学習者が半数以上にのぼる（58%）。
  - \* 特にA1レベル（CEFRの初級レベル）において英語が好きでない学習者が多い（65%）。
- ・ 半数近くが、英語という言葉を実際に使うイメージを持っていない。
  - \* 「海外旅行などをするとき、英語で日常的な会話をし、コミュニケーションを楽しめるようになりたい」は比較的多い（36.7%）が、

**▶ 1. 学習ポートフォリオとはどのようなものか**

ポートフォリオとは、もともと「書類入れ」という意味ですが、そこから派生し、「目的に沿って、必要な情報を記録したり、関連する資料を保存するためのもの」と定義されます。教育分野でのポートフォリオは、教師が自分の指導に活用する指導ポートフォリオ (teaching portfolio) と、生徒が自分の学習に活用する学習ポートフォリオ (learning portfolio) の2つに大別されます。

例えば、学習ポートフォリオに関する文科省の考えは、以下のように示されています (文部科学省 2008)。

学生が、学習過程ならびに各種の学習成果 (例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など) を長期にわたって収集したものの。それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的とする。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用される。

この「従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価」という記述は、これまでテストのみで行ってきた評価を、学習者のさまざまな学習の記録を活用して、個人としてのさまざまな要素を考慮したものへと変える方向性を示しています。このように、ポートフォリオは、集団から個人の学習者に焦点を当てるきっかけを提供できるツールとなる可能性があります。

### ▶ 1. Can-do リストの導入

文科省は英語の実践的な技能を各学校での到達目標として示した Can-do リストの導入を促進しています。ただし、その目的において、教師が指導と評価に活用することを重視するという側面に比べて、学習者自身が自分の学習の目標を自覚し、成果を自己評価するツールとしての側面はあまり前面に出ていないように思われます。

確かに、英語の実践的な技能を各学校での到達目標として示すことは、英語の授業が実際に社会で役立つ言語の技能の習得の場となっていない現状を変える可能性はあります。Can-do リストの取り組みの基本的な手順は、学習の目標として英語を用いてできることを確認し、さらに学習に取り組んだ後、「実際に活用できるようになったのか」という観点からその学習を評価するというものです。その過程で、自分の学習のプロセスに意識的になり、自分のニーズに合った英語の技能を習得できる可能性があります。

### ▶ 2. 各学校における Can-do リストの作成

言語学習における Can-do リストというのは、学ぶ言語を使って、実社会でできることのリストという意味です。英語の場合、「実社会でできる」ということは、その作成において、本来、その学習者が属する地域社会や国に必要な英語の能力の行動基準に準じて作成されるべきでしょう。実際に、CEFR もヨーロッパという地域内における行動基準の検討から開発されています。各学校における Can-do リストの導入においても、英語という言語を使って、日本人としてどのような社会活動を営んでいくのかという行動基準があれば、各学校で Can-do リストを検討する基本的な資料となるでしょう。本来、このような行動基準は、国の言語政策となるの



## ポートフォリオで取り組む 英語学習の観点

### ▶ 1. 英語学習でポートフォリオを活用するために

第3章で述べたように、ポートフォリオを効果的に使うためには、どのように授業を設計し、実践していくのが重要となります。つまり、教師は自分の担当する生徒たちのニーズや実態に即したポートフォリオを作成することで、自分の授業設計を根本から見直す機会を得るのです。

本章では、それぞれの学校で、英語学習ポートフォリオを活用して、どのような授業を行うべきなのかについて、基本となる観点を示して、検討します。

### ▶ 2. Communicative Language Teaching (CLT) の観点

コミュニケーション能力の養成をめざした外国語学習に焦点を当てた考え方に、Communicative Language Teaching (コミュニケーションのための言語教育、以下 CLT) があります。これは、文法知識や単語を覚えることに偏った知識偏重の外国語教育の反省から生まれました。CLT は、1970 年代の初めに生まれた、コミュニケーションを充実させるための言語教育という基本理念で、その方法や考え方もさまざまな視点から検証されてきました。つまり、その指導法に具体的な完成例はなく、「コミュニケーションを充実させる」指導法の基本的なコンセプトであると考えてもよいでしょう。しかし、「コミュニケーションを充実させる」ことは、単に「英語を使いこなす」学習を意味するわけではありません。CLT を考える際に重要な点は、単に英語の技能を伸ばす方法だけに目を向けず、学習者個人が自分の英語学習の価値や必要性を理解し、自分に適した学習方法に意識的になることをめざすという点です。その学習プロセスが、学習者自身にとって本来の「コミュニケーションを充実させる」ことにつながると考えています。本書ではこのような観点から、授業における CLT を

# 開発編

## 高校生用ポートフォリオの開発

---

第 1 章 英語学習ポートフォリオの開発

第 2 章 英語学習ポートフォリオの試行的な取り組み

▶ 1. My Learning Mate の開発

本章では、「理論編」で検討した観点を踏まえて開発した、高校生用の英語学習ポートフォリオ、My Learning Mate（以下 MLM）について解説します（清田 2014a, b）。これは、英語を学ぶ高校生に寄り添って、支援することを意図して名付けられました。各学校でポートフォリオを作成する際に、「理論編」と合わせて参考にしてください。

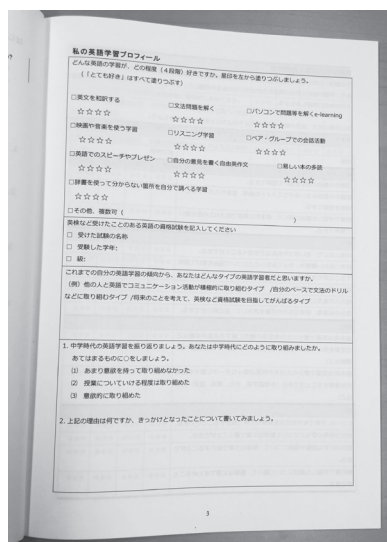
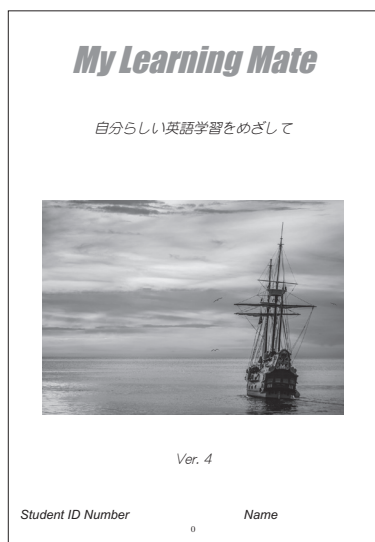


図 1.1 MLM の表紙と「私の英語学習プロフィール」の項目

ポートフォリオの一番の目的は、学習者の英語学習への意識を変え、その結果、意欲を向上させることにあります。筆者はこれまで、大学生の英

### ▶ 1. 高校での実践

英語学習ポートフォリオの実験的な例として MLM を開発しましたが、その効果を検証するために、実際の高校の現場でポートフォリオを活用した取り組みを行いました。具体的には、都内の私立高校の先生方と協同して、同校の1年生を対象に取り組みました。本章では、その概要を解説します。結果として、学習者と指導者に関して2つの成果が確認されました。

学習者に関する成果としては、英語学習に対する意識が深まり、学習意欲の向上が見られました。また、教師にも意識の変化が見られ、自分の指導に対して新たな気づきがありました。「実践編」では、ポートフォリオを活用したさらに発展的な複数の実践例が解説されています。

実践の準備は、新年度の始まる前、約5ヵ月間の期間を取りました。ポートフォリオの内容の確認と、それに沿った指導計画（評価を含む）の作成を行いました。その内容は、以下の通りです。

#### 1.1 学習目標としての Can-do リストの確認と指導計画

MLM は、コミュニケーション英語の教科書 *All Aboard! Communication English I*（東京書籍）に準拠して作られています。実践校ではすでに同教科書を採用していたので、教材に関して共通の理解があり、すぐに lesson goal と、年間の英語力の Can-do リストなどの検討に取り組むことができました。

教科書を前提とした Can-do リストを作成しても、「教科書をどのように使って、前述した到達の観点を伸ばすのか」という指導法を検討しないと、リストは単なる「絵に描いた餅」となってしまいます。仮に、Can-do リストを作成しても、授業が教師の一方的な解説や訳読中心では、生

# 実践編

## 多様な学習環境での取り組み

---

- 第 1 章 教室を飛び出してモチベーションアップ
  - 第 2 章 コミュニケーション活動で英語学習への姿勢改善を
  - 第 3 章 生徒のゆるやかな学びの見える化
  - 第 4 章 授業を大胆に再構成
  - 第 5 章 教師の自己成長のためのツール
-

# 教室を飛び出して モチベーションアップ

東京学芸大学附属竹早中学校での実践

松津英恵

## # 自分の教師経験

- ・ 経験した校種：私立中高一貫校（女子校）、国立大学附属中学校 2 校
- ・ 教職年数：22 年

## # 実践校の実態

- ・ 学年：第 2 学年
- ・ クラスの人数：1 クラス 40 人在籍（男子 20 名、女子 20 名）、各学年 4 クラス編成
- ・ 英語学習の時間数：週 4 時間
- ・ 生徒の英語力と英語学習への意欲：生徒の学力には開きがあり、英語についても習熟度に差はあるが、英語への関心は高い生徒が多い。

## # MLM 導入のねらい

- ・ 各学期、1 年間の学習の成果を確認させ、学習への取り組みを促す。
- ・ 将来的に楽しみながら英語に関わっていく生徒を育成する。

## # MLM 実践の結果

- ・ 生徒の英語へのより前向きな姿勢、英語を使うことへの関心が見られた。

## # 今後の課題

MLM 導入前から実施していた月ごとの振り返り活動を MLM と有機的に結びつけ、生徒たちの負担にならない形で実施・継続するために、今後どのように整理していくかについての精査、および見直しを検討し、学習者の自律を支えるための活動を充実させる必要がある。

## コミュニケーション活動で 英語学習への姿勢改善を 蒲田女子高等学校での実践

木内美穂

### # 自分の教師経験

- ・ 経験した校種：高等学校（都立共学、私立共学、私立女子）
- ・ 教職年数：18年

### # 実践校の実態

- ・ 普通科（幼児教育・保育コース、キャリア・デザインコース）
- ・ クラスの人数：約40名
- ・ 英語学習の時間数：1年生 コミュニケーション英語Ⅰ（4単位）、  
2-3年生 コミュニケーション英語Ⅱ（各3単位）、英語表現Ⅰ（各1単位）
- ・ 英語の学習に自信のない生徒が多い。

### # MLM 導入のねらい

- ・ 学習に取り組む生徒の姿勢の改善。
- ・ コミュニケーション活動を中心とした授業への転換。
- ・ 評価方法の見直し。

### # MLM 実践の結果

- ・ 生徒の英語学習に対する否定的な意識の改善。
- ・ 授業内容の改善。

### # 今後の課題

- ・ 題材についてより深く考えることのできる活動を充実させる。
- ・ 教室外で自分の英語を理解してもらえたと感じられる体験ができるような、身近なことを題材とした活動を充実させる。

齋藤理一郎

### # 自分の教師経験

- ・教職年数 25 年。学習に遅れがちな生徒の学校での勤務経験が長い。
- ・私立中高全寮制、県立女子高、県立共学高、県立定時制高校の経歴。

### # 実践校の実態

- ・昼間部定時制・単位制高校。学年・クラスという枠組みはない。
- ・習熟度別・少人数クラス制を敷く。1 クラスの人数は、10～20 名。
- ・「コミュニケーション英語 I（必修 4 単位）」は、90 分×週 2 回の授業。
- ・生徒が抱える課題として、「学習への苦手意識」「学習経験や習慣の不足」「学習の目的意識の希薄さ」が挙げられる。

### # MLM 導入のねらい

- ・生徒に英語学習の目的意識を持たせ、学習意欲を向上させる。
- ・個々の教員の授業力を向上し、教科全体としての協体制度を促進する。

### # MLM 実践の結果

- ・生徒の学習意欲の向上に、一定の効果が見られた。
- ・目的意識を持って英語学習に取り組む生徒の数が増えた。
- ・学力観・生徒への視点について、教員の共通理解のきっかけとなった。

### # 今後の課題

- ・ポートフォリオの目的と意義を、教科全体で十分に理解する。
- ・まず教員が学力観を転換し、それが生徒にも伝わるようにする。
- ・教員が、「生徒の意欲の変化」の認識を共有する。



鶴田京子

### # 自分の教師経験

- ・ 経験した校種：公立高等学校普通科3校
- ・ 教職年数：17年

### # 実践校の実態

- ・ クラスの人数：1学年4クラス（平均40人クラス）
- ・ 英語学習の時間数：1、2年生一週5時間 3年生一週4時間
- ・ 進路多様校。
- ・ 生徒の英語力と英語学習への意欲に開きがある。

### # MLM 導入のねらい

- ・ 授業の全体構成の改善。
- ・ 教科書の難易度の変更による授業内容の多面化。

### # MLM 実践の結果

- ・ 自分の木の記入を意識づけることへの苦戦。
- ・ 授業を活動中心の展開に改善。
- ・ 教科書の内容から発展的な活動事例。

### # 今後の課題

- ・ MLMの振り返りの工夫の必要性。
- ・ 教師のMLMへの介入の度合い。

**# 自分の教師経験**

- ・ 経験した校種：高等学校（総合学科）
- ・ 教職年数：2年

**# 実践校の実態**

- ・ 総合学科の進路多様校で、1学年4クラス（平均40人クラス）。
- ・ スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校・国際バカロレア（IB）認定校。
- ・ 生徒の英語力と英語学習への意欲は生徒間で大きな差があるが、2年次以降に英検2級以上に合格する生徒も多数出るようになった。

**# MLM 導入のねらい**

- ・ 多様な生徒が個々に英語学習の動機を持てるようになることを期待した。
- ・ 生徒主体の授業に転換できることを期待した。

**# MLM 実践の結果**

- ・ 英語学習の主体性、英語学習にポジティブな変化が見られた。
- ・ 生徒の学習意欲やつまずきの実態を把握でき、授業改善につながった。

**# 今後の課題**

- ・ Writing および Speaking 活動、ポートフォリオそのものの評価が難しい。
- ・ MLM と CLIL、グローバル教育、国際バカロレア（IB）との融合。

# 作成編

使用する教材をもとにした作成方法

---

第 1 章 英語を学び続ける学習者の育成をめざして

第 2 章 思考力・国際理解の姿勢を養う授業をめざして

---

# 英語を学び続ける学習者の 育成をめざして

東京学芸大学附属竹早中学校での MLM 作成例

松津英恵

## ▶ 1. MLM の構成

高校生版の MLM にならい、また教科書教材については、勤務校で採用している *NEW HORIZON English Course 2*（東京書籍）に沿って、中学2年生用 MLM を作成しました。構成は以下の通りです。

- ・ 私の英語学習プロフィール
- ・ 英語学習の目標と自己評価
- ・ 未来の自分と英語学習、自分の木、英語学習インタビュー
- ・ 学びの記録
- ・ これからの課題

## ▶ 2. MLM および各項目作成における留意点

本校での MLM 作成にあたり、高校生版の MLM をもとにどのように中学生に合わせた形を作成したか、以下項目別に紹介します。

### 2.1 私の英語学習プロフィール

筆者がこれまで毎年、年度始めに実施してきた生徒への「英語学習についてのアンケート」に、「好きな学習方法」への質問項目を加え、B4判で1枚半の内容で作成しました（資料 1.1）。また担当学年が中学2年生で、英語学習を本格的に始めるようになって学習歴が1年と短く、自分の学習スタイルが確立されていない生徒が多いことも鑑み、今回は高校生版にある「自分の英語学習者のタイプ」についての質問項目を盛り込みませんでした。

# 思考力・国際理解の姿勢を養う 授業をめざして

筑波大学附属坂戸高等学校での作成例

福田美紀

## ▶ 1. MLM の構成

本校では、桐原書店の *WORLD TREK Communication English* シリーズを使用しています。今回、*All Aboard!* シリーズに対応して作られた MLM を参考にしながら、本校の現状に合わせて独自の MLM を作成しました。構成は既存のものと同様、下記の通りとなっています。

- (1) 授業で役立つ英語表現集
- (2) 私の英語学習プロフィール
- (3) 英語学習の目標と自己評価
- (4) 未来の自分と英語学習、自分の木
- (5) 学びの記録
- (6) これからの課題

## ▶ 2. MLM の作成

本項では、上述の MLM の構成の中で、特に筆者の勤務校の状況に応じて作成した (3) 英語学習の目標と自己評価と、同時に作成した「MLM を活用した指導計画」について述べます。

### 2.1 「英語学習の目標と自己評価」と「MLM を活用した指導計画」

生徒が使用する MLM 中にある「英語学習の目標と自己評価」には、1年間の英語学習の達成目標が Can-do の形で示されています。

この Can-do リストの作成にあたっては、各単元と年間の Can-do リストの名称を明確化するため、教科書の単元の題材や言語材料を参考にしました。その中で最初に取り組んだのが、各単元のまとめの言語活動の設定